

69 おたてやま 御建山古墳(久能寺25号墳)

— 因幡地方有数の埴輪を豊富にもつ円墳 —

所在地

八頭郡八頭町久能寺字鐘突堂

立地

私都川左岸の河岸段丘上に立地していた。

時期

古墳時代中期後半か

発見と調査

古墳の存在は江戸時代から知られていた。1956年(昭和31)に¹⁾、県立八頭高校の教員が中心となった八頭郷土文化研究会と鳥取大学歴史学研究会が、郷土史の解明を目的として合同で発掘調査を行なった(文献3)。

遺跡の種類

円墳

遺構と遺物

1956年(昭和31)の調査では、円筒埴輪列と墳頂部埋葬施設の発掘が行なわれたようで、埴輪列を追って円形に幅1mのトレンチを設定したようである。したがって、墳端は確認されていないが、測量された範囲が概ね古墳の形状と規模を反映していたと考えるほかない。墳頂平坦面よりも2mほど低い位置に傾斜の緩い場所があり、多くの円筒埴輪が原位置をとどめて出土したことから、その部分に平坦面があったと考えられる。2段築成になる可能性がある。図からは径25m、高さ3.6mの円墳と考えられるが、本来は、さらに規模が大きいと考えられる(図3)。

電気探査の結果を踏まえて、当初は石室と予想した墳頂部の埋葬施設が掘られたようだが、実際には石材を使った埋葬施設ではなく、地表下65cmで刀剣の破片が出土した。また、同じく地表下2mで「土師式土器(朱色)」が出土したという。さらに、墳頂部西側で須恵器(祝部式土器)もあった。

出土品のほとんどは鳥取大学に移管され、研究が「委しよく」されたとのことであるが、その任務は果たされないまま数10年の歳月が流れた。埴輪以外の遺物は、その後散逸して行方不明である。教育学部・地域学部で保管されてきた円筒埴輪については、全点ではないもの

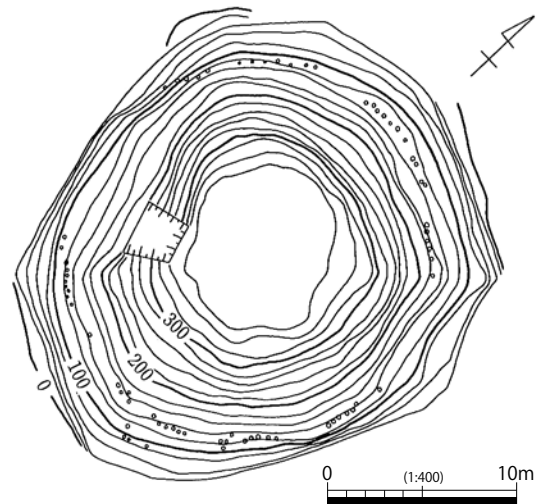


図1 御建山古墳実測図

の、1989年(平成元)に原田雅弘が分析的に紹介している(文献2)。円筒埴輪資料の現状は、30年前の保管状況から混乱があり、文献3で提示された資料と現物の対照に一定の時間がかかる。ここでは原田の成果を引用し、抜本的な再整理は他日を期したい。

一方、従来の報告から漏れていた朝顔形埴輪、形象埴輪については、新たに実測図を作成したので、それらの記述に重点を置く。

円筒埴輪は、底部(1段目)径が10数cm~20cm程度のものまでやや幅がある(図1)。突帯は断面形が台形をなすものと、小さな三角形を呈するものが多く、M字状を呈するものは少ない。いずれも突出度は低い。2段目に円形スカシを持つものがあり、判明する限りスカシ穴の形状は円形である。全形が窺い知れる資料はないが、最もよく残存するもので20cm前後である。文献4では復元高3、40cmと想定されており、それが妥当だとすると、突帯2条3段構成と考えうる。

底部外面は基本的にタテハケ調整のものが多いが、2次調整にヨコハケを施すものがある。2段目には2次調整ヨコハケを施すものも多くあり、B種ヨコハケを施すものもあるとされるが、現状の鳥取大学所蔵資料を探索する限り、明確にB種ヨコハケと言える破片がない。部分的にヨコハケが静止した資料はあるが、静止位置は不揃いで技法的に確立したものとして施されていないと思われる。内面は指ナデの痕跡をよく残し、輪積みの痕跡を消しきれていないものもある。

朝顔形埴輪の口縁部の破片があり、複合口縁壺の1次

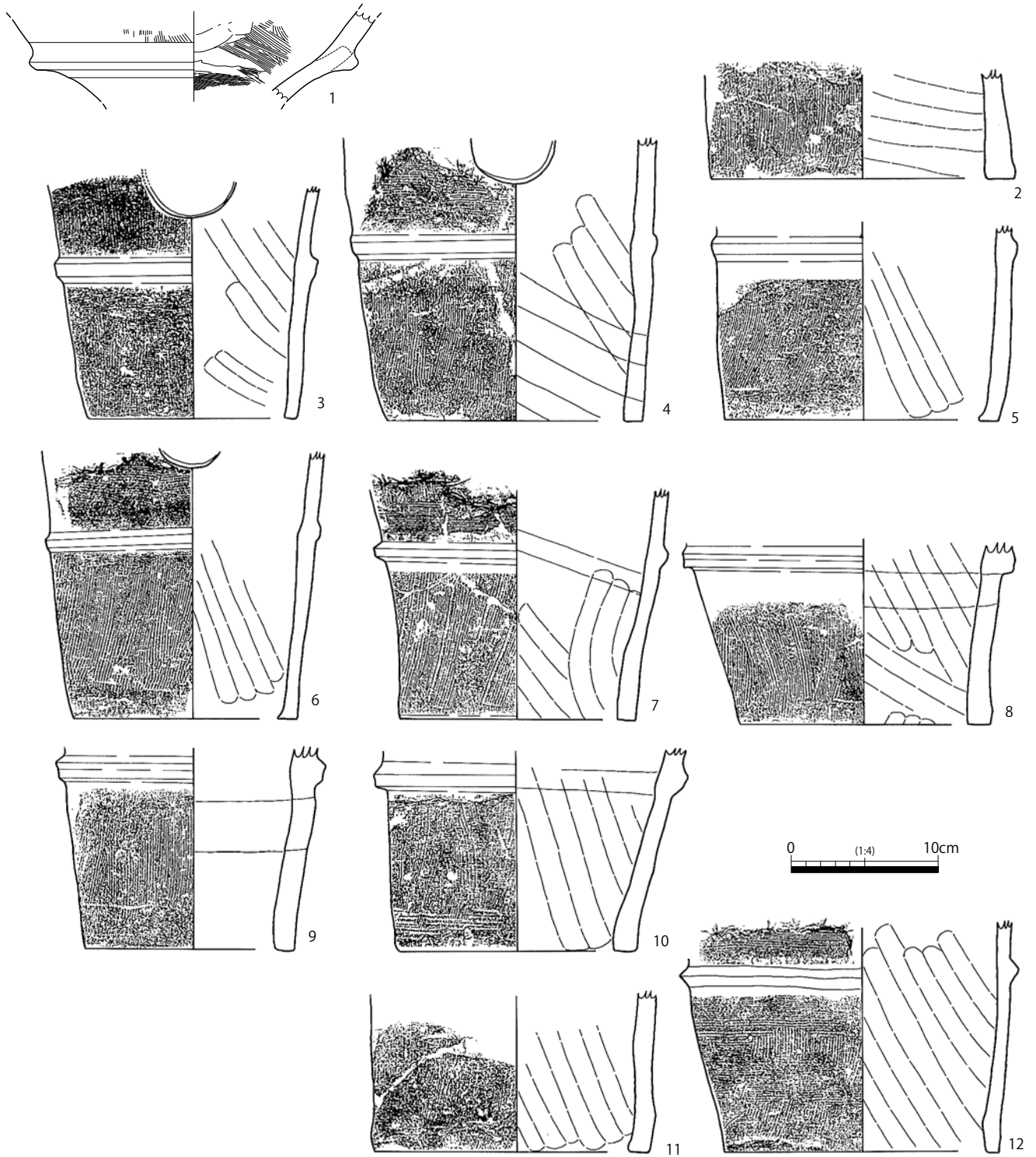


図2 御建山古墳出土土円筒埴輪

口縁と2次口縁の接合部の破片である(図2-1)。突帯部分で径22.4cmを測る。

形象埴輪は、家形埴輪が少なくとも2個体、馬形埴輪が1個体、人物埴輪の手が1個存在する。

家形埴輪の1つは、切妻形の屋根を持つもので、破風板と平側の壁を残す大きな破片がある(図3-14)。壁はコーナー部が残り、長さ25cm程度のものに復元する

ことができる。直接接点はないが、もう一方の妻側の破片もあり、妻壁の一部と両側の破風板が残存する(図3-15)。棟部は剥離した痕跡を残すが、棟飾りとなるヒレ飾りの破片がある(図3-13)。これらに対応する側廻りの破片が2点あり、いずれも突帯が残る。

もう1点の家形埴輪は、寄棟屋根の軒先部分と考えられる破片が4点ある。胎土や色調などから同一個体と考

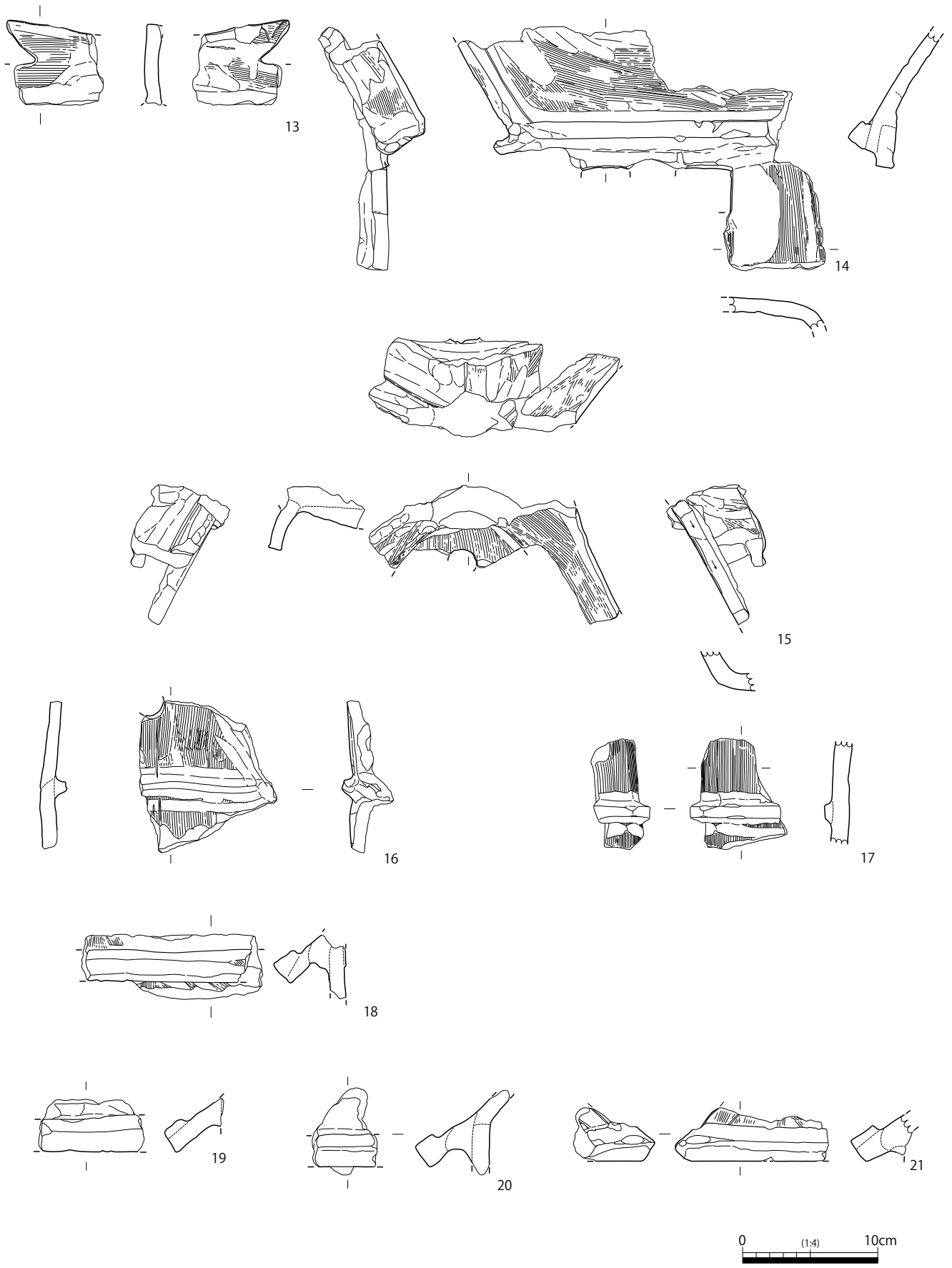


図3 御建山古墳家形埴輪

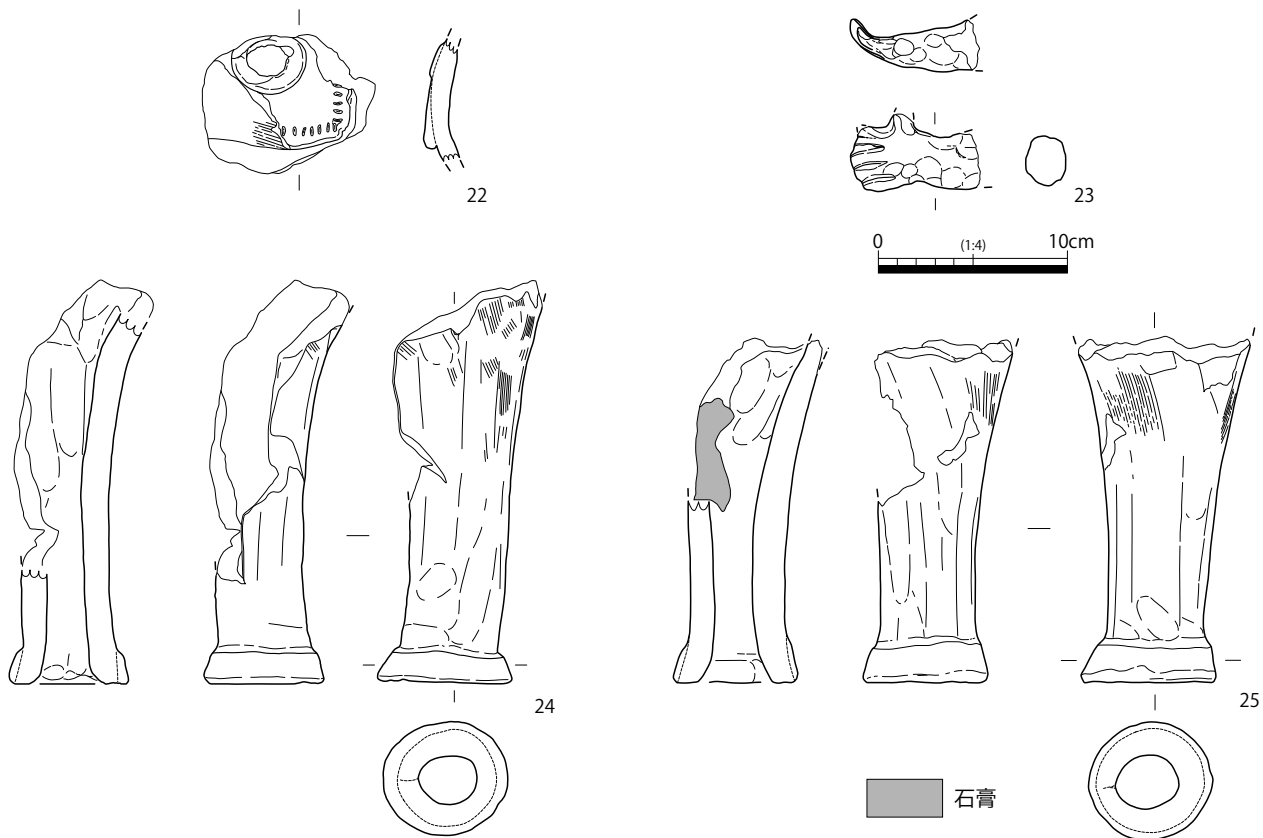


図4 御建山古墳馬形埴輪・人物埴輪

えられる。外面に赤色塗彩される。

馬形埴輪は、脚部片が2点、胴部片が1点ある。脚部は、粘土板を円筒状に成形する方法で作られる（図4-24、25）。棒状の工具に巻きつけて成形するようで、内面に圧痕が残る。井上裕一¹⁾の分類でA2類に相当し、脚端部に帯状粘土を貼り付けて蹄を表現する写実的なものである（文献1）。高さは、21.4cmと18.3cmを測る。前肢、後肢、左右の別はわからない。

胴部と考えられる破片は、輪^{わあぶみ}と障泥^{あおり}と考えられる貼り付け粘土が残る。障泥は、縁部にステッチ状の線刻が巡るものである（図4-22）。

人物の手は、左手の手首から先の破片で、指は切り込みを入れて表現する（図4-23）。やや掌側に曲がっており、何かを掴んでいたと考えられる。大きさから、馬に騎乗する人物の可能性もある。

特徴と意義

鳥取県内では円筒埴輪列の調査例が少ないため、埴輪の設置方法や配列を検討する素材になりうる。その意味では貴重な事例であるが、遺物の十分な検討はこれまでになく、資料の散逸を招いてしまっている点は惜しまれる。内容的には少量だが、円筒埴輪と形象埴輪のセット

関係を確認できる点も重要である。

現状と遺物

古墳は調査後に破壊されて現存しない。上述の通り、失われた出土遺物もあるが、20点あまりの円筒埴輪と実測図を掲載した朝顔形埴輪、形象埴輪は鳥取大学地域学部考古学研究室で保管している。円筒埴輪の一部は、八頭町教育委員会でも保管されている。

文献

1. 井上裕一 1985 「馬形埴輪の研究－製作技法を中心として－」『古代探叢Ⅱ－早稲田大学考古学会創立35周年記念考古学論集－』、早稲田大学出版部、pp. 369-414
2. 豊島吉則・平勢隆郎・久保穰二郎・原田雅弘 1989 「鳥取大学構内出土の遺物」『鳥取大学教育学部研究報告（人文・社会科学）』第40巻第2号、pp. 81-138
3. 藤原薫 1956 『久能寺御建山古墳の発掘調査－報告概要－』八頭郷土文化研究会

註

- 1) 文献4には、1951年とある。

（高田 健一）